

その他

thinking-in-action か reflecting-in-action か ～パトリシア・ベナーのドナルド・ショーン批判をめぐって～ “Thinking-in-Action” or “Reflecting-in-Action”: Patricia Benner’s Critique of Donald Schön

吉浜 文洋

Fumihiko YOSHIHAMA

抄 録

ベナーとショーンは、実践知を高く評価する理論家として知られている。しかし、ベナーは、熟達した実践家の思考/行為の過程をめぐってショーンの「行動しつつ内省する reflecting-in-action (行為の中の省察)」を批判し、「行動しつつ考える thinking-in-action」を対置している。ベナーのショーン批判の主要な論点は、①熟達した実践には暗黙知のような言語化できない知が使われているか ②熟達者の問題解決は即応的な仮説検証によるのか ③専門職の「リフレクション」は、状況から後退しその外にいるというスタンスでなされるのか—ということである。

このような論点について、プラグマティストとしてのデューイやショーンの立場から検討した。専門職の実践には、「暗黙知」「パターン認識」「ナラティブな理解」「リフレクション (行為の中の省察)」等、さまざまな認識方法や実践知が使われている。したがって、一部の認識方法のみを強調し、限定するベナーのショーン批判は、妥当ではない(①②)。また、デューイの reflective thinking やショーンの reflecting-in-action は、状況の中で状況との相互交渉を繰り返すことで学び、熟達していくことを基軸にした実践論であり、③についても妥当性を欠くといえる。

キーワード ■ 実践知, 熟達化, 行為の中の省察, パトリシア・ベナー,
ドナルド・ショーン

はじめに

哲学者ヒューバート・L・ドレファイスは、「技能獲得の4段階説」を車の運転と子供の倫理的な発達を例をあげながら提示している。技能獲得一般に関する理論としてよく知られているこの説は、技能の発達を第1段階 - 初心者、第2段階 - 中級者、第3段階 - 上級者、第4段階 - エキスパートに区分する。最も高次である第4段階のエキスパートになると「自分の技能に身を任せているという感じを持ち」「適切な行為をいかに遂行すべきかを知っている」とされる¹⁾。パトリシア・ベナーは、このドレファイスの「技能獲得の4段階説」を臨床看護に適用し看護職の技能獲得について論じている²⁾。一方、ドナルド・ショーンは、「行為の中の省察 reflecting-in-action」「行為のなかの知 knowing-in-action」等の専門職の実践の中の知や思考について論じ「反省的实践家 (reflective practitioner)」という概念を提起したことで知られている³⁾。

両者は、専門職の熟達について論じているが、拠って立つ哲学は異なり、ベナーが解釈学的現象学、ショーンがプラグマティズムである^{注1)}。この論考は、あまり意識されることのない両者の違いの一端を明らかにすることを目的としている。検討の素材は、ベナーのショーン批判である。このショーン批判の検討を通してショーンの反省的实践への理解を深めるとともにベナーの主張との違いを浮き彫りにしたい。

ショーンは、「探究の論理：デューイの遺産」と題した講演で「私はデューイの＜反省的思考 (reflective thought)＞の代わりに＜反省的实践 (reflective practice)＞を自分のキーワードとして、デューイの探究の理論 (Dewey's theory of inquiry) の私バージョンを作り上げようとしてきた、といえるだろう」とデューイの後継者であることを明確にしている⁴⁾。確かにショーンの主張は、教育哲学者として知られる初期プラグマティストであるデューイまで遡り、デューイの視点から考えると理解しやすい。なお、デューイやショーンの立場からのベナー批判は、G. ロルフによって以下のように展開されている。

(1) ベナーは、熟達者は考えることなく直感的に判断していると主張するが、熟達者は、問題解決法を用いていると考えるべきである。

(2) 直観的に判断し実践できる技術的熟達者が最高レベルであるとベナーは述べているが、それを超える「再帰的实践」がある。

ロルフは、ベナーのいうように熟達者は直感的に判断しているわけではないことを強調している。(2)の再帰的实践とは、即応的実験ともいえる reflect-in-action (行為内省察) を行うなかで試行的理論を生み出しつつ仮説検証的に臨床に関わることである。再帰的と表現されているのは、常に現実に戻り立ち戻って考えたこと (仮説、試行理論) の有効性を確かめることを核とした実践だからである。そのような実践を通して技能とか暗黙知といわれるものを技術にし、形式知として示すことができればベナーのいう熟達者を超えることができるとロルフは考えて

いる⁵⁾。熟達者のワザが「直感的な判断」として神秘化されることに、ロルフは不満なのであろう。

この論考は、ロルフのような本格的なベナー批判ではなく、ベナーのショーン批判をとおし、ショーンの省察的（反省的）実践家論の主張をより深く理解することを目指している。したがってベナーの「直観的な判断」に焦点を当てた議論は展開していない。

I. ベナーのショーン批判：「暗黙の規則」か、「ナラティブ的理解」か

前述の通り、パトリシア・ベナーは、哲学者ドレファイスの技能獲得の段階を看護師に適用して、看護における熟達化の問題を実証的に研究したことで知られている。ベナーは、ショーンの「行為の中の省察 reflecting-in-action」に対し「行動しつつ考える thinking-in-action」を対置してショーンを批判する。「卓越した臨床判断や熟練したふるまいの本質」のとらえ方について見解を異にするので、ショーンの「行動しつつ内省する」ではなく「行動しつつ考える」というフレーズを使うというのが批判の理由とされている⁶⁾。

あげられている論点は2つある。ひとつは、「人は、ユニークで不確かな状況の意味がわかる専門的達人（アーティスト）が存在することは認めるであろうが、彼らの専門的手腕が何であるかをうまく説明する方法は持っていない。せいぜい、彼らはまだ明白にされていない規則に従っているのだらうといえるだけである」（ショーン「Educating the Reflective Practitioner」1991）とのショーンの見解に関してである。

もうひとつは、ショーンが「アーティスト（専門的達人）は、その場その場で新しい規則を作り出す」と述べていることについての批判である。これは、「行為の中の省察 reflecting-in-action」が作り出す「探究のはかない短命的なエピソード」⁴⁾のことを指していると思われる。あるいは、作り出された「新しい規則」を一種の知と考えれば、「行為のなかの知 knowing-in-action」のことになる。この知はほとんどが暗黙知であり、通常は記述できないとショーンはいう。このような行為の中の瞬時の省察、あるいは暗黙知に基礎をおいた問題解決をしているのが達人であるとのショーンの見解には同意できないというのがベナーの主張である^{注2)}。

ベナーは、「達人は、規則に則った思考というより、むしろ状況のナラティブ的理解に基づいて、創造的に行動しつつ考える」と主張する。しかし、「行動しつつ考える」が何を意味するかを明らかにするには膨大な論証を必要とするとして、それ以上深入りするのを避けている。専門的達人の実践を「行動しつつ考える」としたのは、「刻々と変化する状況で臨床家が意欲的に思考し、革新的で創造的であるという意味合いが伝わるから」であるという。一方、ショーンのリフレクション（省察）は、「後退すること、あるいは状況の外部にいるという意味を持つ」ので、使わないのだと述べている⁶⁾。

ただ、ショーンを全面否定しているわけではなく、ベナーのショーン批判は揺らいでおり、

一貫性を欠く面もある。変化する状況下で意欲的に思考し革新的、創造的であることを意味するベナーの「thinking-in-action」も後退し状況の外部にいるスタンスをとっているとベナーが批判するショーンの「reflecting-in-action」の「いずれも臨床知を身につけるためには重要である」と述べている場合もある⁶⁾。

また、ベナーは別の著書ではショーンの次のような問題設定についての見解に支持を表明している。「理論的研究に基づいた知識をいかにうまく使いこなすか、という問題設定から議論を始めるのではなく、理論知では割り切れない実践の現場で熟練技能者が現に発揮している高度な技能を細心に吟味することから何を学べるか、というように問題を立てるべきである」(ショーン「Educating the Reflective Practitioner」)。ここで述べられているのはショーンの「技術的合理性モデル」批判である。それに対し、ベナーは「熟練した実践の内に体现されている知がこうして尊重されるようになれば、看護教育にも新しい項目が加えられることになる」と肯定的に評価している⁷⁾。このセンテンスを読む限りでは、ベナーもショーンも専門職の熟練した実践は「合理的技術モデル」ではとらえられないと、共同戦線を組み抵抗を試みているとの構図が浮かび上がる。実際、ベナーは、ショーンと同様「合理的・技術的思考では、客観性および合理性の限界を批判することはできない」と、分析総合的な方法の限界、不十分さを指摘している⁸⁾。

Ⅱ. ベナーのショーン批判の主な論点

ベナーのショーンの「省察的専門家論」についての批判は次のように整理することができる。

- ①専門的手腕が何であるか説明できないとのショーンの見解は受け入れがたい。
- ②熟達した専門職は、ショーンが言うように行為の最中にその場その場で新しい規則を作りだして問題を解決しているのではなく、むしろ状況のナラティブ的理解に基づいて、創造的に行動しつつ考えている。
- ③変化する状況下で意欲的に思考し革新的、創造的である熟達した専門職は、「リフレクション」といった後退し状況の外部にいるスタンスをとらない。

①と②は、熟達者の問題解決のリソースをめぐる問題である。状況のナラティブな理解が問題解決の役に立っているのか、その場で作り出された新しい規則(知)で問題は解決されているのか、そのどちらが熟達者の実践をよく説明できるかをめぐる議論である。③は、ショーンの省察的実践家論の中心概念である「行為の中の省察(リフレクション)」を問題にしている。省察(リフレクション)は、状況の外に後退してなされるとの理解からの批判である。

まず、①②について検討する。ショーンは、「行為の中に何をすべきかという知的要素が

埋め込まれている」(knowing-in-action)と考えている⁴⁾。ショーンが例示しているように、スムーズにいつている場合の楽器の演奏はまさにそうである。何をすべきかは、「暗黙に存在」し「不明瞭」なまま行為の中に埋め込まれていてほとんど意識することがない。このような意識することのない行為に埋め込まれた知識は、「暗黙」で「不明瞭」あることを認めるとすれば、「明白にされていない規則に従っているのだろう」という以上のことをいうのは困難だ。

プラグマティズムでは、探究(反省的思考)は、疑念から信念へ(パース)、不確定状況から確定状況へ(デューイ)至る過程における経験、問題解決、知の生成に関係する概念とされている。例としてショーンのあげているスムーズに進行している楽器の演奏では、信念や状況は揺らいでいないので問題は意識されていない。したがって探究が必要とされていない実践状況ということになる。この場合、行為は主要には行為に埋め込まれていて何であるか説明できないような「暗黙で不明瞭な知識」によって進行している。

探究(反省的思考)が開始されるのは、何か違和感を持ち行為の継続が躊躇され、立ち止まらざるをえない状況(不確定状況)に立ち至った時である。認知心理学的に言えば、この状況では、それまで意識されることのなかった自己モニタリングが活性化される。デューイによると、このような不確定状況から問題状況が意識されることになり、多くの仮説が生まれる。その仮説の中から実施可能な仮説が絞り込まれ、実施・実験という検証にかけられることで仮説の確からしさが確かめられる(デューイの「探究(反省的思考)」)⁹⁾。

問題が意識された後、つまり探究が開始された後の実践はどうなるのか。全て人間が経験する出来事は一過性であって全く同じ状況、同じ問題というのではない。したがって「どのような問題状況にも、既知の事例のバリエーションであるという側面と、その問題だけが持つユニークな側面とがある」¹⁰⁾とすれば、過去に経験したことからの類推で考える一方、仮説をたてて何らかの働きかけを試みる。そして、状況からフィードバックを受けて、仮説の妥当性を検討し、当初の仮説に修正を加えていくことを繰り返すことで状況への適応(問題の解決)を図る。このように「状況と会話」することをショーンは「行為の中の省察」と呼んでいる。ベナーは、ショーンのこの繰り返される「状況との会話」の過程で次々行為の指針となる仮説を生み出す能力(その場その場で新しい規則を作りだして問題を解決する能力)が熟達なのだとする考え方を批判しているのである。ここでいわれている「規則」の多くは、主体が状況に働きかけ、その結果を引き受けるといった相互性から生成してくる暗黙知である。ベナーは、ショーンの「行為の中の省察」や「状況との会話」を否定し、「状況のナラティブ的理解に基づいて、創造的に行動しつつ考え」ることが熟達であるとする。

なぜ、ショーンは、専門職の実践活動は「行為の中の省察」を重視すべきだと主張するのか。それは、「技術的合理性モデル」では、現在の専門職のおかれている複雑で不確実性に満ちた問題状況は打破できない、あるいは限界があると考えているからである。統計的に処理され、

合理的とされる方法が示され、それにそって実践することを第一義とするスタンス。それが技術的合理性モデルである。そうではなく現場で「創造的に行動しつつ考える」ことが必要だとショーンは考えている。既定のガイドラインを盲信することなく現場で自らの行為が状況をどう変化させたかモニターし、必要に応じて修正を加えていく。微視的な仮説 - 検証過程（探究）である「行為の中の省察」とは、そのようなプロセスである。

看護実践が、ガイドライン、マニュアル、標準看護計画、クリニカルパスの適用のみで過不足なく十全に行えると考えている臨床の看護職は、まずいないだろう。ガイドライン等に沿って始まったケアであっても、臨床状況によってはケアの場で即時的な工夫が加えられる。ケアの準備段階、ケアを行いながら、常にガイドライン等がどこまで使えるかを看護者は、考えているのではないか。ガイドライン、マニュアルの類は、全て仮説なのである。

熟達者の問題解決は、既存の理論の適用ではなく、実践の場で考えることが第一であることについては、ショーンとベナーの間にそう大きな考え方の違いはない。見解が異なるのは、現場における問題解決のプロセスにおいて状況をどう認識し、関わりはどう展開されるかということについてである。ベナーは「状況のナラティブ的理解」をもとに問題は解決されると考えている。それに対しショーンは「行為の最中にその場その場で新しい規則を作りだして問題を解決している」と考える。この相違をベナーは問題にしているのである。問題解決のための「規則」を作り出すのは、仮説検証過程としての「行為の中の（瞬時の）省察」である^{注3)}。端的に言えば、臨床家は、問題解決にナラティブな推論を使うのか、仮説検証過程を踏むのかということベナーは問題にしていることになるだろう。

Ⅲ. ナラティブな理解

ここで、ショーンの「行為の中の省察」に対してベナーの対置する「ナラティブな理解」について検討しておくことにする。ベナーは、臨床家には、「時間の経過に応じたナラティブな理解」が求められるという。ベナーの著書は、ナラティブ事例で埋められているし「ナラティブ」という言葉が頻回に登場する。しかし、主要な著書におけるその説明のほとんどは断片的である。それでも、「ベナー 看護ケアの臨床知」（2012）には、比較的まとまった形で「経験的学習におけるナラティブの役割」として以下の記述がある¹¹⁾。

- ・臨床における学び、すなわち経験的学習はナラティブによって構成されるので、臨床知は、ナラティブを通じて理解することが最もわかりやすく身につけやすい。
- ・ナラティブによって「状況に働きかけたり影響を与える能力」である発動力（agency）や流動性、実践的理解が把握される。
- ・記憶は、ナラティブな構造になっているので、ナラティブを素材に学ぶことは教育的な意義があり、臨床知の記憶を確固たるものにする。

翻訳されている文献の中でベナーが最もナラティブについてページを割いているのは「エキスパートナースとの対話—ベナー看護論・ナラティブス・看護倫理—」(2004)である。この著書では「ナラティブな理解」について理論的なことからどうナラティブを書くかに至るまで詳しく述べられている¹²⁾。ベナーは、エキスパート性を理解するためのナラティブアプローチの前提を2つ上げる。一つは、熟達化には実践的知識と形式的知識が必要であること、もう一つは、行為の選択において「危機」と「チャンス」を認識することである。

実践的知識は、「どのようにするかを知っていること knowing how」であり、形式的知識は「それを知っていること knowing that」とされている。理論を知っていることと実践できることは別であり、その両方の知識があって初めて、エキスパート性は発揮できるとベナーは考えている。「技術的・合理的思考」によってつくられたガイドラインやマニュアルなどの理論、方法などの適用だけでは熟達した臨床実践は行えない。それらに加え現場の実践的知が動員される必要がある。実践的な世界は、常に複雑であり時間の流れ、状況への依存等を考慮しなければならない。理論ではなく時に knowing how が優先されることもあるのが実践だとベナーは述べる¹²⁾。

実践的な世界は複雑であるということの説明の中で、ベナーは「人間のエキスパート性は、状況を読む能力、パターンを認識し理解する能力によって特徴づけられる」と述べている。人間は、混沌としていて偶然が支配している複雑な状況であってもパターンとしてとらえることで、そこに起こった問題を理解する。熟達した実践者は、「現在の状況を過去の全体状況とのかかわりのなかで読み取るようになる」し、わずかな類似点を見逃さずパターンを読み取ることができるというのである。このようにベナーのいう「ナラティブな理解」は、パターン認識をその方法的基礎としていることが明確にされている。2つ目の「危機」と「チャンス」は、何を言おうとしているか。これは、多くのパターンを認識できる有能な実践者は、そのパターンから一つを選び出して実行のためのプランとする際、この選択に伴う「危機」と「チャンス」に気づくことについての指摘である。

ベナーの主張に従えば、ショーンの「行為の中の省察 (reflection-in-action)」が仮説検証的な方法を想定しているのに対し、ベナーの「行動しつつ考える (thinking-in-action)」ではパターン認識によって詳細に状況を読むという違いがある。しかし、このような対比には違和感を禁じ得ない。看護者は、この両方を使って患者を理解し、問題に対処しているのではないか。どちらか一方というより仮説検証による探求、パターン認識による状況把握、両者を的確に使い分ける、あるいは意識せずに使っているのが熟達した実践者なのではないか。ただ、記述することが困難な実践的知識 (knowing how) はパターン認識になじみやすく、技能から技術へ、あるいは暗黙知から形式知へ転化できる理論的知識 (knowing that) は仮説検証の方法になじみやすいという違いがあるだけなのではないかと思う。このことは、認知心理学的にも妥当なのではないかと考えている。

楠見は、認知心理学、認知科学の研究者の提唱する熟達者の特徴を5つに整理している¹³⁾。その一つとして「どのような状況が典型的なのか、どのような事象が時間的・空間的に結びついているのか(連合)などの多くのパターンについての知識に支えられて」微妙な変化(病状悪化のきざし等)、他の要因による状態である可能性(本来の症状ではなく薬物の副作用)などに気づくということがあげられている。これは、ベナーのパターン認識である。一方、楠見は、「熟達者は、正確な自己モニタリングを行い、自分のエラーや理解の状態を把握できる」「(熟達者は)メタ認知のプロセスとして、自己モニタリングや省察(reflection)を行い、自己調整を行う」とも述べている。この熟達者の特徴は、ショーンのreflecting-in-actionに相当するといつてよいだろう。楠見の述べる通り、熟達者がどのような能力を駆使しているかを一つの能力で説明することは不可能であり、パターン認識も探究も、あるいは暗黙知や分析的思考も活用していると考えるのが看護の臨床においてもリアルな認識だろう。ベナーの排中律的な主張は、認知科学的な立場からも否定されたいえよう。

IV. 「リフレクション」の対象へ向かうスタンス

ベナーのショーン批判の3点目は、「変化する状況下で意欲的に思考し革新的、創造的である熟達した専門職は、『リフレクション』といった後退し状況の外部にいるスタンスをとらない」というものである。この点を検討する。

ベナーがショーンのリフレクションという言葉避け、あえて「(行動しつつ)考える」としているのは、リフレクションに「後退」「状況の外部にいる」というニュアンスがあるからだという⁶⁾。この批判は、デューイの反省思考(探究)からショーンの反省的实践へという系譜で考えると全くの誤解である。ショーンはこれらのことについて十分に論じていないかもしれないが、少なくとも、デューイは、経験を説明する概念であるリフレクションは未来志向であること、状況の外から傍観観察するのではなく「手と操作のイメージ」で対象(環境)と相互作用しつつ状況に関わるスタンスであることを強調している¹⁴⁾。デューイは「世界の外部にある傍観者」という立場から「経験」を理解しようとするそれまでの経験概念を批判して次のように述べている。

「経験は、頭脳の活動と等しいというわけではない。経験とは、社会的物理的環境に対して相互作用を取り結ぶすべての有機的能動者-受動者の総体なのである。頭脳というものは、第一義的には、ある種の行動を司る器官であって、世界を認識する器官なのではない。そして、既に述べてきたことを繰り返していえば、有機体というものを、いわば、たまたま一つの対象として含んでいる諸々の自然的対象が、相互に作用し合い、相互に関連し合う、ある種の様式、これが経験するということなのである。同じく説得的に示すなら、経験とは第一次的には認識することではなく、何かに働きかけ何かを被る諸々の様式であるということになる。」¹⁵⁾

「経験」では頭で考えることは、二次的なことであり、まず「相互作用」という実践なのだということが言われている。生物が環境に「働きかけ何かを被る」ことを原初的なイメージとしてデューイは、「経験」を捉えているのである。現実には距離を置き「状況の外部にいる」傍観者をデューイの経験概念は想定していない。経験を生物の環境との相互作用をベースに考えるデューイは、以下のような考え方を否定する¹⁶⁾。

- ・ 経験は第一義的には心的事象であって主観的なものである。
- ・ 経験が経験として自覚できるのは、人間が働きかけ、必要によっては変更される客観的世界においてである。
- ・ 経験は、「既に『与えられた』、あるいは、今『与えられている』ものに結びついている」と考えられていて、過去だけが重要である。

このようにデューイは、既に過ぎ去った過去の経験から学ぶという「過去だけが重要」という考え方を否定する。デューイは、経験について「実験的であって、与えられているものを変えていく努力である。経験を特徴づけるものは、未来を視野に入れること、つまり、未知のものへと到達することである。未来との結びつきこそ、経験の顕著な特徴である」と述べる。デューイが未来を指向するものとして経験を捉えているのは明白である。

経験の一つの態様であるショーンの「行為の中の省察 reflection-in-action」は、まさにこのような「不確かで疑わしい困惑した」状況（不確定状況）における未来を指向した問題解決中のリフレクションである。デューイは、「経験するということは生きるということ」だとのべ、生物学の比喩で考えることを勧める。

生命は、環境のエネルギーを取り入れることで自分自身の活動を維持する。生命現象は、自然エネルギーに依存している。しかし、エネルギーをもたらず自然は、生命活動を促進する（成長、健康）こともあれば阻止するように働く（衰退、病）こともある。この相違は、現在生じていることが未来とどういう関係であるかによる区分である。ショーンの「行為の中の省察」は、衰退や病と同じように、未来へ向かうことが阻止された状態において発動される。成長し健康である場合には環境に適合的となるように事態は推移していて「行為の中の知」のみで対処できるので「省察」を要さない。一方、状況との間に齟齬を来し、先行きの見通しが怪しいとき、行為は中断され「行為の中の省察」が働き出し、問題解決へと進行するのである。

以上述べたようにデューイの経験概念（これを引き継いだショーンの反省的实践家論）からするとリフレクションにベナーのいう「後退」のニュアンスはない。「経験とは、現在に関与している未来でなくして、何であろうか」¹⁷⁾とデューイは、未来へと前進していくための経験の現在性を強調している。

V. 2つの思考様式：論理 - 科学的様式と物語の様式

ベナーは、熟達した技能をもつエキスパートは、ナラティブな理解に基づいて実践能力を発揮しているという。ショーンの反省的実践の依拠している思考は行為の一環であるとするプラグマティズム的な立場とベナーのナラティブな理解の相違について別の観点から考えてみる。認知科学者ブルーナーは、次のように思考様式を論理 - 科学的様式（パラディグマティックな様式）と物語の様式の2つに分ける¹⁸⁾。

- ・ 論理 - 科学的様式：普遍的な真理の条件の探究。「形式的な数学的体系の理念」の実現をめざす。諸仮説によって推進され観察可能なものに照らし合わせて検証される。
- ・ 物語の様式：できごと間の特定の関係の探究。人間の「意図、行為、そしてそれらの成りゆきを示す変転や帰結を問題にする」。迫真性を信じ込ませ真実味をもたらす。

この2つの思考様式（認知作用）は、それぞれ経験を整理し現実を理解する方法として独自性を持つので、「おたがいに還元されえない」とされている。ブルーナーに倣うと「科学的」根拠を問題にするEBM（evidence based medicine）は、論理 - 科学的様式とみなせる。NBM（narrative based medicine）の思考様式は、「物語の様式」である。ベナーの「ナラティブな理解」もこの様式のバージョンに含まれるだろう。それでは、ショーンの「reflecting-in-action」は、論理 - 科学的様式ということになるのだろうか。ベナーのNBM指向、ショーンのEBM指向として対比させて捉えていいかということである。

科学的方法是、一般的には仮説演繹法として理解されている。仮説を設定し、仮説から演繹的に検証プランを策定し、そのプランを実施することで帰納的に検証するのが仮説演繹法である。ブルーナーの論理 - 科学的様式もまた仮説検証を方法としているし、観察可能性を問題にしている点は、科学的方法一般（仮説演繹法）と同様である。

パースに始まるプラグマティズムの問題解決法も仮説設定をアブダクションとしている点は異なるが、仮説演繹法の範疇にあると考えることができる。しかし、プラグマティズムは、「普遍的な真理の条件」の探求や「形式的な数学的体系の理念」の実現には、距離を置いている。それを象徴しているのがデューイの「保証付きの言明可能性」という概念である。探究を続けて、問題が解決され確定状況に至ったとしても、あくまで一定の条件下ではこう言える可能性がある、それが保障されたといえるだけだと限界を意識するようデューイは促す（論文の「研究の限界」は、「保証付きの言明可能性」について述べているといえよう）。全ての知識は常に改訂にさらされていて真理として確定されることはないというのがプラグマティズムの真理観、知識観である¹⁹⁾。

ショーンの「行為の中の省察」概念は、仮説検証的な探求の側面もあるのでこの点はブルー

ナーの論理 - 科学的様式に近いといえる。しかし、暗黙知の概念を導入している点は異なるし、ショーンの *reflecting-in-practice* は、実践の場における省察であり、「形式的な数学的体系の理念」の実現をめざす思考様式とはいえない。

EBM は「最善の科学的根拠」として、保健医療の場に知識が持ち込まれ適用される「技術的合理性モデル」である。ショーンは、不確実性、複雑性の中の実践とならざるを得ない現代の専門職の現場は、このモデルのみでは立ちいかないと批判していることは、前述のとおりである。現場の実践を考えると、ブルーナーのいう「普遍的な真理の条件の探求」から導きだされた知識を適用することによる問題解決には、限界がある^{注4)}。どうしても現場的な知、その場で相応的になされる仮説検証としての「行為の中の省察」が必要となるというのがショーンの主張である。このように考えてくると、単純にベナーの「物語の様式」、ショーンの「科学的様式」として対比させることはできないことがわかる。

おわりに

thinking-in-action なのか *reflecting-in-action* なのか。ベナーの主張を検討してきたのだが、あれかこれかではなく、あれもこれもものではないかというのが本論考の結論である。看護職として熟達するには、ナラティブな対象理解を支えるパターン認識の活用のみならず、実践の場における微視的仮説検証といえる「行為の中の省察」の能力も必要である。

ショーンは、プラグマティズムの系譜に連なる教育理論家である。プラグマティストであるデューイは、天体観測という傍観観測から発展してきた物理学の観察をモデルにした方法論を万能視することに批判的である。人間が日常的に行う観察は、対象と主体が相互に影響し合う参加観察であるとデューイは考えている。ショーンの「リフレクション」もまた、同様な参加観察を基軸にしており、決してベナーが批判するような「後退し状況の外部にいるスタンス」ではない。ショーンの「反省的（省察的）実践 *reflective practice*」は、デューイの「反省的思考 (*reflective thinking*)」の専門職バージョンである⁴⁾。ショーンの「行為の中の省察」は、デューイの論理学にまで遡及して理解されなければならない。

ベナーのショーン批判については「暗黙知」「直観」等検討されなければならない課題が残っているが、現在のところそれらを検討できるだけの力量はない。両者の主張の背景となっている哲学については、さらに理解を深めなければならないだろう。しかし、それを超えてベナー、ショーンの共通した関心である臨床実践から生まれてくる実践的な知の正当な評価に焦点を当てた議論を活性化させることの意義の方が大きいといえるのではないか。

〔注〕

注 1) ベナーは、哲学的には、ハイデッガーの解釈学的現象学に依拠し、方法論はドレファイスモデルを採用している。そのモデルの提唱者の一人であるヒューバート・L・ドレファイスは、ハイデッガーが第三者的な立ち位置、客観的姿勢で臨むのでなければ法則や原理は発見できないとした哲学者の姿勢を批判していることを紹介している。ハイデッガーは、デューイを含むプラグマティストは、この考え方に異議申し立てをしていたと評価する。少なくとも主観-客観図式を批判し、別の認識の方法を模索したという意味では、現象学とプラグマティズムは相いれないわけではない。(ヒューバート・L・ドレファイス著 門脇俊介監訳：世界内存在『存在と時間』における日常性の解釈学 産業図書 2000 6-7, 291)

注 2) ベナーの「ベナー看護ケアの臨床知 行動しつつ考えること」におけるショーン批判は、初版(日本語訳 2005)と第 2 版(日本語訳 2012)では、記述が異なる。初版では、ショーンへの批判点は 2 つあり、その一つが「(達人は) 暗黙の規則に従っている」とのショーンの主張についてであった。ベナーは、この点を補強しておく必要を感じたのか、第 2 版では、ドレファイス兄弟の見解を書き加えている(下線部分)。

【第 2 版】「Schon は続けて、アーティスト(専門的達人)はその場その場で新しい規則を作り出す、と主張する。この点と、専門的達人は潜在的な知識や以前の事例から得た背景の深い理解に従っている(Dreyfus & Dreyfus, 1986)」という点において Schon と筆者らの見解は異なる。達人は、規則に則った思考というより、むしろ状況のナラティブ的理解に基づいて、創造的に行動しつつ考えると筆者らは主張する」

Schon goes on to say that the artist (expert) makes up new rules on the spot. We differ with schon on this point and claim that experts are following tacit knowledge and deep background understanding from prior whole cases (Dreyfus & Dreyfus, 1986). We think the artist is engaged in productive engaged thinking-in-action based upon a narrative understanding of the situation, rather than rule-governed thinking.

(パトリシア ベナー , パトリシア フーパー-キラキディス著, 井上智子監訳: ベナー看護ケアの臨床知 行動しつつ考えること第 2 版 医学書院 2012 13-15)

注 3) ショーンの省察的实践に関する主な用語

「行為の中の(瞬時の)省察」: 「省察(リフレクション)」は、仮説検証過程。それを駆使して専門職の行為は行われているが、それは必ずしも意識化、言語化できるわけではない。

「状況との会話」: 人的、物理的対象に働きかけ、働きかけられる能動・受動過程。「省察」は、この過程を通して行われる。

「行為の中の知」: この「知」はほとんどが暗黙知であり、顔の認知のように誰だかは知っているが、他人との違いを説明するのが困難のような知である。われわれは、説明できるよりも多くのことを知っているといわれるが、それは言語化困難な暗黙知があることを示している。

注 4) EBM は、医学の不確実性に臨床疫学という統計的な手法を用いてより確実な診断、治療を目指す方法だが、100% 確実な情報を提供できるわけではない。統計的な手法を用いている以上必ず例外がある。EBM の医療情報をも仮説として扱い検証していくのがデューイやショーンのリフレクションである。

〔文献〕

- 1) ヒューバート・L・ドレファイス著 門脇俊介監訳: 世界内存在——『存在と時間』における日常性の解釈学——産業図書 2000 17-25

- 2) パトリシア・ベナー著 井部俊子監訳：ベナー看護論 新訳版—初心者から達人へ
- 3) ドナルド・ショーン著 佐藤学, 秋田喜代美訳：専門家の知恵 反省的实践家は行為しながら考える
- 4) Donald A. Schon The Theory of Inquiry : Dewey's Legacy to Education Curriculum Inquiry 22-2, 119-139, 1992
- 5) ゲーリー・ロルフ著 塚本明子訳：看護実践のアボリア D・ショーン《省察的实践論》の挑戦 ゆみる出版 2017 13-14
- 6) パトリシア ベナー, パトリシア フーパー - キラキデイス 他著 井上智子監訳：ベナー看護ケアの臨床知 行動しつつ考えること第2版 医学書院 2012 13-15
- 7) ベナー, ルーベル著 難波卓志訳 現象学的人間論と看護 医学書院 1999 444
- 8) パトリシア・ベナー編著 早野真佐子訳 エキスパートナースとの対話—ベナー看護論・ナラティブス・看護倫理—照林社 2004 140-141
- 9) デューイ：論理学—探求の理論 魚津郁夫訳 (責任編集上山春平 中公バックス世界の名著 59 パース ジェイムズ デューイ 所収) 中央公論社 1980 488-506
- 10) 鈴木忠：生涯発達のダイナミズム 東京大学出版会 2008 124-125
- 11) 前掲書 6) 33
- 12) 前掲書 8) 163-164
- 13) 金井壽宏・楠見孝編：実践知 エキスパートの知性 有斐閣 2012 17-19
- 14) レイモンド・D・ボイスヴァート著, 藤井千春訳：ジョン・デューイ——現代を問い直す」 晃洋書房 2015 48-53
- 15) ジョン・デューイ「哲学の回復の必要」(植木豊編訳 プラグマティズム古典集成 所収) 作品社 2014 512-513
- 16) 同書 489
- 17) 同書 490-491
- 18) ジェローム・ブルーナー著 田中一彦訳：可能世界の心理 みすず書房 1998 16-73
- 19) 伊藤邦武：プラグマティズム ちくま新書 2016 100-101

(よしはま ふみひろ 看護学科)

2018年10月3日受理

